

中国語史的比較言語学方法論序説

『長田夏樹論述集（下）』第3章

（原載：『外事論叢』第2巻第2・3号，1948年7月）

これは復員の2年ほど後、神戸外大赴任直後に発表された最早期の論文の一つであり、冒頭で歴代の中国語音韻史資料が網羅されており、その後の研究の方向を示す見取り図でもあった。カールグレンの上古音に関する研究の要約が主内容で、複声母に関して来母と閉鎖音とが諧声する系列（第一類）、来母と舌尖摩擦音とが諧声する系列（第二類）、明母と曉母とが諧声する系列（第三類）の前二者につき44-45頁でオリジナルな所説が見られる。

第一類については、シャム語と比較して「烙」—k'lök（燃える、焼ける）、「變」—plien、「兼」—klem（兼ねる）、「藍」—k'ram（藍）、「隔」—krak（分離する）、「降」—lǒng、「風」—lǒm（風）、「剝」—lokなどの例を挙げる。そのうち、「藍」「變」などはそれ以前から知られていた有名なものだが、「降」「風」の比較例などは新たに提案されたものと思われ、興味深い。こうした語彙を挙げた上で「このことはシャム語と中国語がかつて一つの言語であったことを物語るものでなくてはならない。」とする。シャム語と中国語の間の共通語彙については、Wulff・李方桂・西田龍雄・Prapin Manomaivibool・邢公畹・富田竹二郎・龔群虎などが集めているが、絶対数があまり多くなく、そのうち文化語彙は借用によるものであろう。

第二類、つまり「麗～灑、吏～史、林～森」などについて、「これはシナ=チベット語族における古い語頭重子音の名残であると考えられる。すなわちこの混合子音とでも名づべき子音を前に持つ—は [l] [ʃ] [ʎ] のいずれでもない l であって Paul Vial の *Dictionnaire français-Lolo*, Hong Kong, 1909 に shl をもって表記されてある—と同じ性質であると考えられる。」と述べる。ところが、Vial 著の音声描写は非常に簡略であり、p.7 で “En outre des consonnes simples, le Lolo admet les groupes suivants: *ch, dj, dl, dz, gn, shl, tch, tl, ts*, qui se prononceront à la française: *cha, djo, dlee, dza, gna, shle, shli, shlee, shlo, tcho, tou, tsa*, etc.” とだけある。フランス語との対比からすると [ʃl] のような二重子音であるかに思われる。同書 p.26 に Blanc, shlou という語彙が挙がっており、陳康『彝語方言研究』（中央民族大学出版社，2010年）の542頁の「白」の30方言の形を見ると撒尼の [lu³³] というのが最も近いようである。著者は「重子音」なら [ʃl]、「混合子音」なら [ʃ] という音価を想定したものか。

第三類についてはカールグレンの所説以上のことは述べられていないが、1960年になりヤーホントフが唇音以外の調音点についても鼻音・流音と無声子音とが諧声する一連の字例を指摘し、s-+鼻音・流音ないし無声鼻音・流音の系列が立てられている。（遠藤光暁）